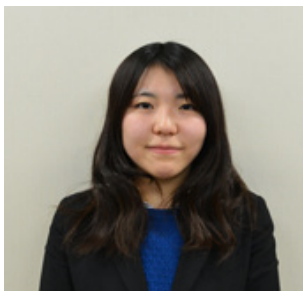
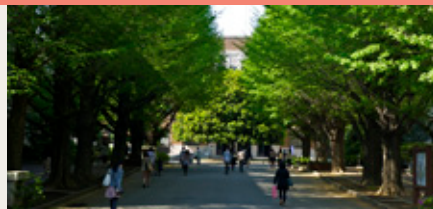


お茶の水女子大学 文教育学部

文学部系と教育学部系の学科が連携し、多彩な教育内容を提供。学際的で自由な発想の教育研究を可能にしているのが本学部の特色です。教育活動も実験・実習・文献研究が多彩で、問題を立て、データを収集し、議論を展開する能力の育成を重視しています。



■大学生
山口ゆみさん



■先生
米田俊彦先生



■卒業生
山崎奈々絵さん

CONTENTS

- プロフィール
- 5年後に向けて
- 大学生活について
- 高校生へのアドバイス
- 就職活動、仕事について

●プロフィール

お茶の水女子大学文教育学部の特徴を教えてください。



■先生

文教育学部という学部名のとおり、文学部と教育学部両方の学びを経験できるのが一番の特徴です。その特徴は文教育学部にある学科の専門分野によく表れています。哲学・倫理学・美術史・比較歴史学・地理学について学ぶ『人文科学科』。日本語と日本文学、英中仏の言語圏の言語と文化について学ぶ『言語文化学科』。社会学・教育科学・心理学を学ぶ『人間社会科学科』。舞踊教育学・音楽表現を学ぶ『芸術・表現行動学科』。これがお茶の水女子大学文教育学部の4つの学科になります。

それぞれの学科での専門教育が充実していることはもちろんですが、自分が選んだ学科のプログラム

を主として、他学科のプログラムを履修することもできます。例えば、教育学を主として学び、サブとして心理学を学ぶということができるのです。このことで、専門についてより深く理解しつつ、幅広く周辺知識を身につけることができます。

『グローバル文化学環』も特徴のひとつですね。各学科から教員が集まり、学部全体にまたがった横断的な講座を開いています。グローバル文化学環の講義をサブとして受講することで、自分が学んだことをグローバル社会の中でどう活かして、どう振る舞うべきかと言うことを学ぶことができます。

先生の研究内容について教えてください。

■先生

『人間社会科学』は高校教育に似たような教科がないので、高校生にはなじみがない学問かもしれませんね。心理学、社会学、教育学という学問が人間社会科学の中に含まれています。「人間の社会の現実を、いろいろな方法で捕まえる」と高校生向けのガイダンスでは話すのですが、目の前にある事実を様々な側面から見つめ、分析し、その裏にある真実や思想などを読み解いていく学問とでもいいでしょうか。

なかでも私は教育史・教育制度論について研究しています。現在手がけているのは、第二次世界大戦後の戦後教育についての研究です。戦後どのような教育が日本で行われたかという事実は、小中高の社会の授業で学ぶと思います。私はその事実について、当時の文献や映像などの資料を集め、「実際はどういう教育だったか」「それはなぜ行われたのか」「誰のために行われたのか」「その教育を受けた子どもたちの心の動きはどうだったか」といったことを探ります。その中で史実の裏にある、忘れられた事実が見えてくることがあります。歴史の表舞台には出てこないけれど関わっていた人々や、その人たちの思い、思惑などが見えてくるのです。

ゼミでも同じ研究をされているのですか？

■先生

現在、神奈川県から戦後教育について研究して欲しいという依頼を受けており、文献などの資料も豊富にそろっています。ゼミ生にはその資料を使って、何がわかるのか、何が見えてくるのかということを考えて発表してもらい、その後全員で議論しています。同じ資料を読んだり見たりしても、人が違えば感じ方や考え方が変わってきます。想像力を働かせて史実の裏に隠れた事実を掘り起こしていき、どうしてそう感じ、考えたかを、意見の違う他人と議論する。そのことで歴史や教育の見方だけでなく、社会に出てからも役に立つ「考える姿勢」を身につけてほしいと考えています。

■大学生

私はもともと歴史が好きでしたが、1年生で行われる各コース毎の概論の授業のときに先生が話された「歴史の捉え方」のお話がとても面白く、より興味が深まりゼミを取ることに決めました。

■卒業生

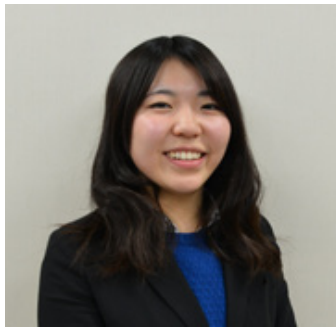
私も大学1年生の時に、一つの事実からいろんな事が読み取れることを学びました。そして自分が

読み取ったことについて他人と議論することで、新たな視野が開けるという経験し、面白さを感じたのが先生のゼミに参加し、その後大学院まで進もうと思ったきっかけになったのです。

■先生

高校までの勉強って、成績をしっかりとるためには教科書にあることをそのまま憶えなければなりませんよね。私のゼミでは「全てのことに疑いを持つ」ようにしています。教科書に書かれていることは、もちろん事実です。でも、その裏には様々な要因や事情、思想があるのです。それを調べて「この歴史的事実の裏にはこういう別の事実もあるのだな」と知ると、同じ事実も見え方や印象が変わります。それが現在の自分の生活に繋がっていて、影響を与えている理由や意味を知ることができる。そのように世間一般に「当たり前」といわれていることを多角的に捉える姿勢は、大学でこそ学べるものですし、社会に必要な素養だと私は考えています。

お二人がお茶の水女子大文教育学部に入学した理由について教えてください。



■大学生

私は高校生の時に「小学校の先生になりたい」と思ったのがきっかけでした。大学を選ぶときにそれまでの自分を振り返ったのですが、もっともお世話になり、影響を受けていたのが小学校の先生だったというのがその理由です。ただ、「教育学部に入って先生になる勉強だけをするのではなく、教育について広く深く勉強したい」という思いもありました。それができる大学を探した時に出会ったのが、教職課程だけでなく様々な勉強ができるお茶の水大学だったんです。

■卒業生

私は中学生や高校生の時から「社会に出て働きたい」と思っていました。同時に、本を読むのが好きで、「本を読んだり書いたりする職業ってないだろうか」と漠然と思っていました。読書の時にはいつも登場人物の背後にある設定や、思いなどを考えていたので、先ほどの先生の話ではないですが「人の裏にあるもの、社会の裏にあるもの」を考えることが職業に結び着かないか、と考えるようになったんです。そこでたどり着いたのが社会学でした。それが学べる大学を選んでいったときに、お茶の水女子大学から「社会に出てからも自立している、家庭に収まらない女性が多い」という印象を受け、「自分もここで学べば、やりたいことを社会に役立てられる方法が見つかるのじゃないか」と思いましたね。あと、我が家の方針が「高校を卒業したら家を出る」だったので、故郷の山口県から出られる学校を探したというのもあります。大学入学後にいろいろな授業を受けた結果、社会学ではなく教育学に進むことになりました。

■大学生

私も同じです。実家は山梨県なのですが、東京に出たいという思いはありました。兄弟が多いので、国公立でと思っていたのも、お茶の水女子大学に決めた一つの理由です。

■先生

本学の中でも文教育学部は地方出身の学生が多く、全国から学生が集まっています。それもあって一般的に女子大というワードから想起される「群れる」という感じはありませんね。誰もがやりたいこと、なりたいたいのをしっかりと持って入学してきているので、それを目指してしっかり集中しているという雰囲気です。大学で様々な地域性の学生と出会って、それが混在する中で刺激し合っているという雰囲気もある。その雰囲気の中で、皆が強い個を作っていますね。それは社会に出ても活躍できる強さにつながっていると思います。

●大学生活について

では大学での生活についてお聞きしたいと思います。

■大学生

先生がおっしゃったように、みんなでグループになっているという感じはないですね。でも、入学して感じたギャップでもあるんですが、とても人の距離感が近いですね。学生同士、先生とも。少人数ということもありますが、誰かが休めばわかりますし、わからないときに質問もしやすい。

■卒業生

校風かもしれないですね。ひとり一人が自立しているイメージはあります。でも決して仲が悪いというわけではない。

■先生

内部進学生も多くて10名程度。高校から進学する際には、マンツーマンに近い状態で希望する学科の講義をあらかじめしっかり受けてもらい、それでも志望が揺るがなければ、推薦入試を受け、合否を決めることになっています。入りたい学生全員が大学に進学できるわけではないので、やはりやりたいことがしっかりと決まっている学生が集まることになりますね。

印象に残っている授業はありますか？

■卒業生

人間社会科学科は心理学の授業があるのですが、数字がいっぱい出てきて理系寄りなところがあるのは予想と違いましたね。一般入試では数学が必修です。私は理系出身なのですが、数字が苦手で…(苦笑)。

■大学生

冒頭に少し話しましたが、1年生の時にコースごとに概論の授業があります。全ての先生がそれぞれ2時間ずつ、どんな研究をしているのかという概要を話してくださるんです。そこで聞いたお話で、

これからの勉強に対しての興味や希望も持てましたし、印象に残っていますね。

■先生

本学では3年次にゼミを3つ履修することになります。その中からゼミを絞って、卒業論文のテーマを決めていくことになります。1年生から選んだゼミに向けて勉強が進められるよう、まず概論の授業を行います。各教授がそれぞれ自分たちのゼミの内容を魅力的に話すようにしています。

先生のゼミはどのような内容なのですか？

■先生

先ほどもお話ししましたが、今年は1950年代中心に神奈川県の子どもの戦後の教育史を取り上げています。分担を決めて、文献や資料を読み解き、毎週発表を行います。ゼミは10人から20人なので、数回担当が回ってきますね。



■大学生

自分が教員志望と言うこともありますが、先生側の視点に立って文献を読むことが多いですね。当時の先生たちが、すごく子どもたちのことを考えて教育に関わっていたことなどが読み取れると、面白いなあと思いますし刺激にもなります。ゼミは人数が少ないこともあり、先生と深い話ができる貴重な時間。米田先生だけでなく、ほかの先生方も話やすく、

多様な視点に気づかせてもらえるのは本学のいい点だと感じています。

■卒業生

先生はゼミで細かい説明をされないんですよ。それは「自分たちで考えてみなさい」ということ。先生の待ってくださるスタンスも、先生の研究室で大学院に進学しようと思った理由の一つです。私は教育について研究しましたが、教員免許は取得していません。入学した当時から、取得するつもりがなかったんです。自分が直接学生に教えるよりも、「どうしたら柔軟に広い視野を持った教員を育成することができるだろう」「そういう教員が受け入れられる教育制度とはどういうものだろう」ということに興味があったんです。それで先生のもとで教育史について研究し、そこで発見したこと、考えたことをこれからの教育に活かせればと思ったのです。

お二人とも地元を離れて進学されていますが、アルバイトなどはされていたか？

■大学生

塾講師のアルバイトをしていました。個別指導で小学校から高校生まで教えましたよ。教職課程は取得すべき単位数が多いので、途中からは授業優先になりアルバイトは減らしましたが、3年を終えて教職課程も落ち着いてきたので、また増やそうと思っています。

■卒業生

私は塾講師や家庭教師もしましたが、歴史ある純喫茶でアルバイトをして、常連のおじいさんやおばあさんの昔話を聞いたり、古美術店で店番をしていたこともありましたね。いろいろ経験しました。

サークルなどには参加されていますか？

■大学生

一年生の時は弓道部に入っていました。いまは、ボランティアで小学校で教える団体に参加して、あまり頻度は高くないですが活動をしています。

■卒業生

私はサークルに入らなかったですね。もちろんサークルを一生懸命やっている同級生もいました。学生会館にはサークルやクラブの部室があって、卒論の締切が近いときは、そこに泊まって卒論に取り組んで、シャワーだけ浴びに家に帰って、また大学に戻ってという学生もいましたねえ（笑）

■大学生

大学の中には学生の控室もありますよね。そこに行くとみんなが本を読んでいたたり、自習をしていて刺激をもらうことができるので、私はよく行きます。お気に入りの場所です。

■卒業生

私は図書館にいたことが多かったですね。本を読むのも好きでしたし、図書館のラウンジでも勉強ができましたし。1階部分には雑談ができるスペースもあって、いろいろ便利でしたね。あと、大学で好きな場所というと、正門から本館への道ですね。キンモクセイなど季節ごとに違う香りがしていて、見た目も変わるので楽しく、いつも正門から入って授業に行っていました。

●就職活動、仕事について

卒業生の進路は、やはり教員になる方が多いのでしょうか？

■先生

教員志望の学生もいますが、そう多いというわけではありません。公務員や民間企業、大学院への進学など多様です。大学院への進学率は高いかもしれませんね。教育学を学んでいることもあり、教育関係の企業に勤める学生も目立ちますね。

■大学生

私も教員志望ですが、就職活動をする予定です。学校教育で学んで身につけたことだけで教壇に立つことに疑問を感じていて、一度は社会に出て視野を広げたいと思っています。目指しているのは教育関係か、個人的には演劇が好きなので、劇団の事務や制作に関われる仕事に就けないか、と調べてい

るところです。院に進むという選択肢も考えています。これから4年生になって卒業論文のテーマを考えるのですが、教育史や教育制度についてもっと深く研究したいという気持ちもあるんです。

■先生

そうすると4年生の5～6月は、就職活動と教育実習で忙しくなりますね。

■大学生

そうですね。将来的には2～3年後に公立小学校の先生に、それも東京で就くことができればと考えています。お茶の水女子大学の教育実習は、附属の小学校で行うので、その期間が一つターニングポイントになると思います。

現在のお仕事の内容について教えてください。



■卒業生

彼女と同じく、柔軟な広い視野を持って教育の仕事について欲しいと思っています。私は大学で、保育士や小学校の先生を養成する学科で講義をしています。お茶の水女子大学の大学院で研究してきた「教員養成に関する研究」が直接仕事に結び着いています。

知識をただ詰め込んだり、学校の先生になるための単位を取るだけの講義にならないよういつも考えています。教えている学生さんが、夢を叶えて教育者となった時、受け持つ生徒ひとり一人とちゃんと向き合える、子どもを子ども扱いせず対等な人間として向き合える、そんな教育者になって欲しいと思って臨んでいます。

● 5年後に向けて

5年後に皆さんは何をしているでしょうか？

■卒業生

さらに5年勤めていると、今より責任も増し、手がける仕事も増えていると思います。忙しい中でもしっかりと時間を見つけて、いまの研究を続けていきたいですね。

現在は小中学校の教員養成がメインの仕事になっていますが、その頃には高校の教員の養成も視野に入れて研究を進めていられればと思っています。

■大学生

大学院に進学するのであれ、就職するのであれ、小学校の先生になれているのであれ、働いていることには違いないと思います。どんな仕事をしているかわかりませんが、ばりばり働いていきたいですね。社会に出て、視野をいまよりもっと広げ、自分を人間として成長させていられればうれしいです。



■先生

そうですね。私はいまより忙しくないといいかな（笑）

■卒業生

私も何も考えず、ただ本を読んでいたという気持ちはありますよ（笑）

■先生

私は資料に埋没するほうが好きなんです。いま手がけている神奈川県の後教育史の研究は、10年計画。だから5年というちょうど半分、折り返し地点ですね。その頃には、研究に専念して、日々資料と格闘していきたい。やはり、時間を忘れて没頭し、どっぷり研究に漬かっている時間というのは、本当にうれしくて楽しくてしょうが無いんです（笑） 65歳になって定年退職すればそれは完全になうのかな。定年しても、自宅で研究は続けようと思っていますよ。

●高校生へのアドバイス

高校生にアドバイスをお願いします。

■大学生

私が高校生に戻ったら、英語の勉強をしっかりとやりますね。特に単語は早くから憶えていきたい。私の英語があまりのびなかったのは、単語数を増やすのをずっと逃げていたから。後から苦労しましたよ〜。

高校では文化系の部活に入っていて、3年生の遅い時期まで活動していたので、勉強の時間を確保するのが大変でした。だから「この日のこの時間は勉強！」と決めてメリハリをつけてました。それはよかったと思います。塾に通わなかったのも、朝早く学校に行って先生に教えてもらったり、部活終わりに夜遅くまで先生に教えてもらったり…いまは先生の仕事の大変さを知ったので、自分はかなり迷惑な生徒だったなあとと思います（笑）

■卒業生

私は世界史と日本史をもっと頑張っていれば…。大学の仕事で入試問題を作る際などに教科書を読むと、書いた人のスタンスや思いがいまなかわかります。そういうところに注目して教科書を読み物として読めば、高校生の時にもっと楽しめたらうな。あとはクラブですね。吹奏楽部って、意外と体育会系ですよ（苦笑） それで投げ出しちゃったので、最後までやっていたらいい経験だったかなと思います。

■先生

私ももっとスポーツに打ち込めばよかったなと思いますね。私立の中高一貫校で、男子校だったので、共学の公立高校を体験したかったなあと思います。私は大学で教育学に出会って、そのまま進路を決めました。そのおかげで、いろんな人の考え方に気づき、事実を発見し、研究することの楽しさを味わっています。もし高校生の皆さんで、人間社会科学科に興味を持った人、あるいは教育史や教育制度に興味を持った人がいれば、堀尾輝久さんの『現代社会と教育』（岩波新書）を読んでみてください。今回ずっとお話ししていた、一つの事実を様々な視点から見るといふことの楽しさを教えてくれる本です。目から鱗が落ちるような考え方が、たくさん書かれていますよ。その楽しさに目覚めた方が、この大学でより深く学び、専門性を身につけるために入学されることを楽しみにしています。

●インタビューに答えてくれた方々



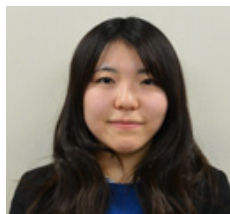
■先生

米田俊彦先生



■卒業生

山崎奈々絵さん



■大学生

山口ゆみさん